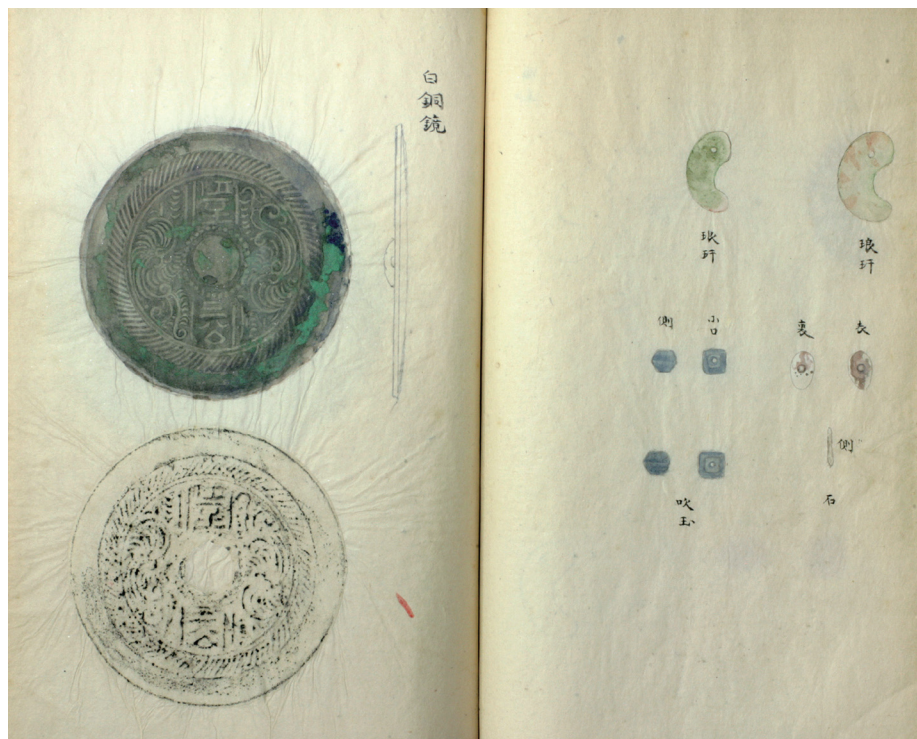


古墳文化（古墳の副葬品）



* 近藤清石文庫64「赤妻古墳記」

解説

3世紀後半から6世紀末ころにかけて、王や豪族を葬るための大きな墓（古墳）が盛んに作られました。大部分の古墳の内部には、副葬品として、銅鏡・玉・銅剣などの祭りの道具や、冠・馬具・鉄製の武器、農具などが納められました。それらは、古墳に葬られた人の性格や、古墳が作られた時期を解明する有力な手がかりとなっています。

写真は、明治時代に作成された赤妻古墳（山口市）の副葬品の拓本とスケッチです。カラー写真が普及していなかったこの時代に、古墳から見つかった勾玉や銅鏡、小刀、櫛などが色鮮やかに描かれています。

赤妻古墳は、5世紀前半に作られた、山口盆地における畿内の影響を受けた古墳としては最古のものです。周囲に壕をめぐらした円墳もしくは帆立貝式古墳と考えられています。これまで、石棺が二つと小石室が一つ見つっていますが、写真の勾玉や白銅鏡が納められていた舟の形をした石棺（舟形石棺）は、県内唯一の事例として、山口県有形文化財に指定されています。現在、この石棺は山口県立山口博物館に、勾玉や白銅鏡は東京国立博物館に保管されています。

* 当館には、赤妻古墳に関する「明治三十年周防国吉敷郡下宇野令村赤妻古光長者すくも塚発見器物図本」という資料もあります（近藤清石文庫65）。

* 赤妻古墳に関する最新の研究成果は、『山口県史』資料編考古1に載っています。